

鴉鳥

きな聲をして、禮をいふてかへる也、万一黏にかゝりても、少しもさわがず身をすくめて、そつとあをのけになりてぶらさがり居れば、はごは上に残り、身ばかり下に落時、こそく、と飛でゆく也、汝等は黏にかゝりたる時、あはてさわぎはためく故に、總身に黏をぬり付て、動くこともならずしてとらへらる、不調法の至り也と、才智がましく語る、末座より鶯鷓といふ小鳥笑て云、人は鳥よりもかしこくて、一たび此手にあひたる者は、下にも細きはごを置き、例の如くぶらさがりて下へ落れば、下なるはごをせなかに付、おもひよらぬ事なれば、さすがの鶯鷓もあはて躁ぎ給ふ故に、總身に黏を塗りてとらへらる、事は同じ事也、

〔新撰字鏡〕鳥 鴉 資昔反、志止々、

〔倭名類聚抄〕羽族八名、鴉鳥 唐韻云、鴉、漢語抄云、鳥名也、

〔類聚名義抄〕九、鴉、カワナ、イシト、鴉、通正音必、如鴉、一足、鶯鷓、赤文白啄、其鳴自呼、鶯鷓、通今、鴉、正、冒脂反、鴉、音空、雀、中、大、鳥、

ト、鴉、シト、鶯、シト、鶯、シト、

〔八雲御抄〕三、下、鴉、まとい、なくなりなどは、をろ狂たる詞なり、まとい、といへどぬれぬなど、中

古歌人詠之歟、

〔藏玉和歌集〕雜、か。う。鳥。し。か。う。ない、

〔本朝食鑑〕六、林、禽、鴉、訓之止、或、今訓、阿、於、之、

集解、鴉似雀而色亦略同、頭背有斑、眉頰稍黃、白有斑、臆胸及脇間黃有紫斑、翅間有白羽、黑斑、腹白脛微赤、帶黃、聲短而小、轉、味稍美、可食之、古昔天武帝九年、攝津國獻白巫鳥、今未見白者也、

肉氣味、甘温無毒、主治、壯陽益精、

附方、傷食腹痛、用、巫鳥、一個、去、頭、足、羽、毛、反、肚、腸、充、梅、干、肉、入、土、器、泥、封、燒、存、性、爲、

〔本朝食鑑〕六、華、和、異、同、鴉、